

新たに見つかった石狩川の2種の鮭漁具について

Two kinds of newly discovered tools for salmon fishing
used in the Ishikari River

荒山 千恵^{*1}・石橋 孝夫^{*2}

Chie ARAYAMA^{*1} and Takao ISHIBASHI^{*2}

要 旨

新たに発見された2種の鮭漁具とは「魚叩き棒」と「鉄製鉋先」（離頭鉋）である。これまで知られてきたサケ漁に用いる「魚叩き棒」の形態はいずれも棒状ないしは横槌状で、今回確認された縦槌状のものは知られていない。また、「鉄製鉋先」についても、アイヌ民族が従来用いてきた「キテ」とは異なるもので、離頭鉋をサケ漁に用いた例はほとんど知られていない。同類の鉋先については本州の太平洋側で行われるカジキ漁などに見られ、これが明治期に北海道へ伝わったことでアイヌ民族が入手し、石狩川のサケ漁で使用された可能性がある。

キーワード：サケ漁，魚叩き棒，縦槌，離頭鉋，鉄製鉋先

1. はじめに

本稿では、かつて石狩川でのサケ漁に使用されていたと伝えられる2種4点の漁具について取り上げる。一つは「木製の槌」（2点），もう一つは「鉄製の鉋先」（2点）である（写真1～4，

図1，図2，表1，表2）。これらは、旧収蔵者がサケ漁場に働きに来ていたアイヌの漁夫から貰ったもので、「木製の槌」は捕獲したサケを叩くための「魚打棒」に、「鉄製の鉋先」はサケを突いて捕獲するために使用されたものという。これまで、この種の道具が石狩川のサケ漁で使用さ

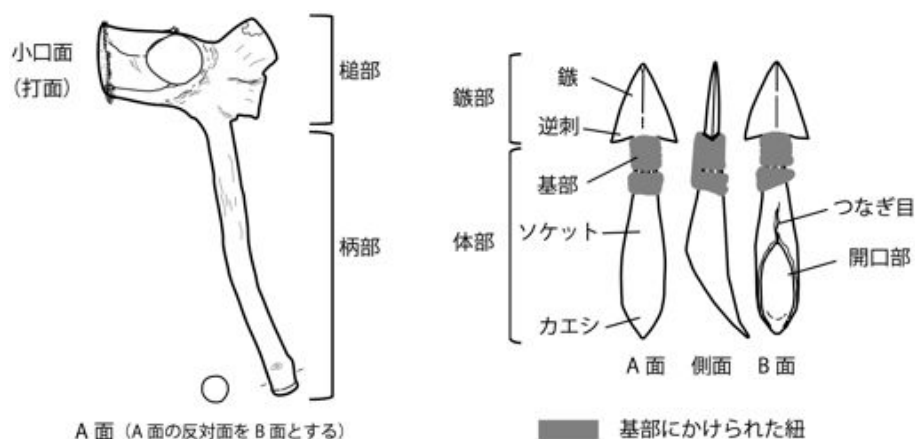


図1. 各資料の部位名称.

^{*1} 石狩市教育委員会生涯学習部文化財課（併任，学芸員） 〒061-3292 北海道石狩市花川北6条1丁目30-2

^{*2} いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

れたことは知られていない。そこで、これらの資料の性格を明らかにするため、聞き取りや博物館等に収蔵されている類似資料の調査を実施した。資料調査は荒山・石橋の共同で、聞き取りは石橋がおこなった。以下、その調査報告について記す。

2. 調査の経緯

調査の経緯は、2019年5月に著者の1人である石橋が弁天歴史公園運上屋棟（石狩市弁天町）の展示品の中に、先に述べたサケ用とされる漁具2種3点を目にしたことに始まる。この展示品は「いしかりガイドボランティアの会」によるもので、展示ラベルには「魚打棒」と「銚（マレク）」と記載され、いずれも石狩市内の今井光男氏からの寄贈であることが表示されていた。

「魚打棒」はサケ漁の際に暴れるサケを叩くための道具で、「魚叩き棒」「鮭叩き棒」などとも称される道具である。従来知られてきたのは棒状

のタイプ（横槌状）（写真5）であるが、展示品2点はいずれもT字型の縦槌状であった。また、「銚（マレク）」とされる展示品1点はアイヌ民族の鮭漁具「マレク」（鉄製の鉤銚）ではなく、鉄製の銚先（離頭銚）であった。この2種の道具がサケ漁に用いられたということは聞いたことがなく、石橋にとっては初見の資料であった。そのため、詳しい内容を知るため、資料管理をしている「いしかりガイドボランティアの会」から資料を借用し、旧収蔵者からの聞き取り・実測・写真撮影等の調査をおこなった。また、聞き取り調査の過程で鉄製の銚先はさらにもう1点あり、旧収蔵者から石狩市本町にある石狩尚古社資料館（中島勝久氏主宰）に寄贈されていることがわかり、同氏の了解を得て同時に調査を実施することになった。さらに、銚先については、道内博物館等に照会のうえ同種の資料調査もおこなった。今回の調査では、苫小牧市美術博物館、北海道博物館で同種の銚先を収蔵していることが確認でき、計6点を実見した（図4、表4）。また、北海道大学北

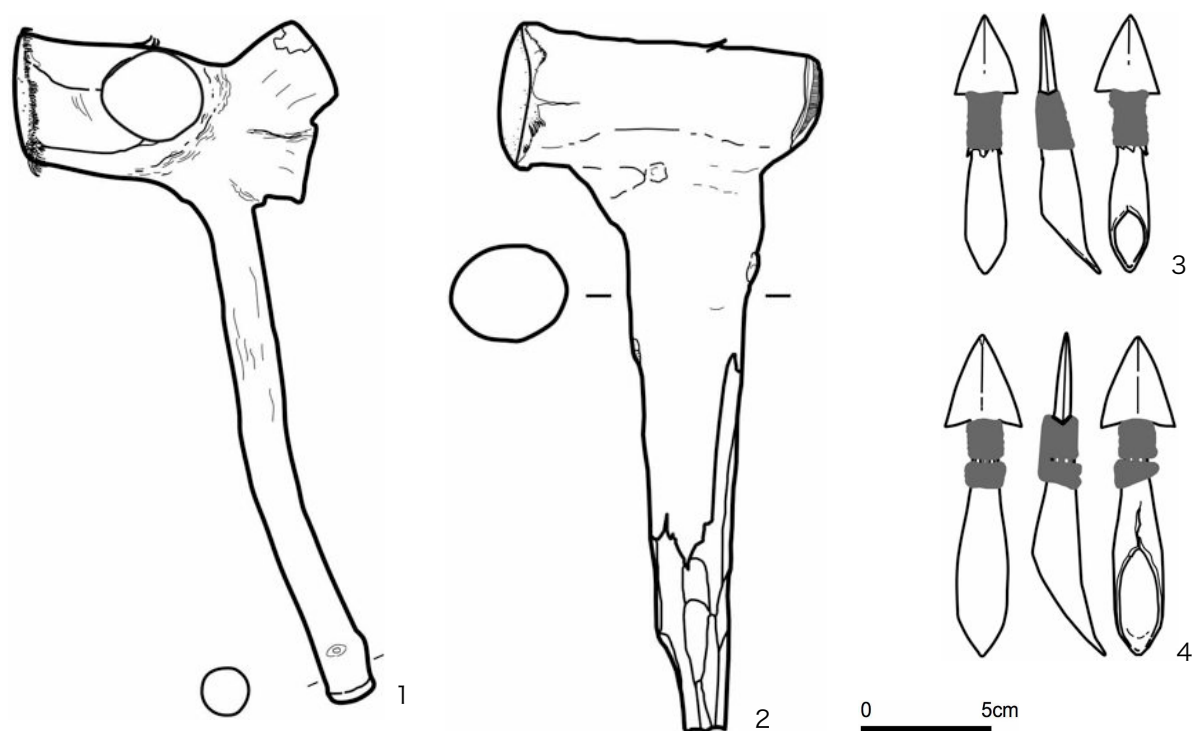


図2. 漁具.

1：魚打棒1，2：魚打棒2，3：鉄製銚先1，4：鉄製銚先2。スケールバーは共通。

（1～3：いしかりガイドボランティアの会収蔵・今井氏旧収蔵，4：石狩尚古社資料館収蔵・今井氏旧収蔵）

方生物圏フィールド科学センター植物園にも3点の収蔵があり、いずれも本州で採取されたもので、提供いただいた資料情報をもとに後述に触れることとする。

なお、本稿に記す資料の部位名称は図1に示すとおりである。

3. 聞き取り調査

資料の来歴について、旧収蔵者の今井光男氏から石橋が聞き取りをおこなった。その結果、寄贈された2種の漁具について次のようなことが明らかとなった。

- ① 2種の漁具は明治半ばから石狩川左岸の志美でサケ曳網漁場をもっていた今井家に伝わったものである。^(注1)
- ② 2種の漁具は今井家で使っていたのではなく、この漁場に働きにきていた対岸に住む生振アイヌの人からもらったものである。
- ③ 2種の漁具の使用法は「鮭の頭部を叩く槌」と「岸に寄った鮭を突くための銛」であり、石狩川で使用された。
- ④ 今井氏自身はこれら2種の漁具が実際に使用されたのは見たことはなく、使用法などは親やアイヌの人から聞いた。銛の復元(柄、繋ぎの長い紐)は今井氏がおこなった。
- ⑤ 鉄製の銛はもう1点あり、石狩尚古社資料館(中島勝久氏)に寄贈した。

- ⑥ 石狩川のサケ漁の叩き棒について、刺し網・流し網漁で乗組員が2人の舟の場合、親方が40cmほどの長い叩き棒を使い、手伝いはそれより短く、30cmほどのものを使うように決まっていた。サケ漁の舟には乗組みの数の叩き棒が備えられていた。

4. 「魚打棒」

4-1. 資料紹介

まずは、サケを叩いたとされる2点の木製品について記載する。資料の展示名称は「魚打棒」となっており、使用目的も「鮭の頭部を叩く槌」ということから、以下「魚打棒」とする。本来、形態的には槌型をしているので「魚打槌」とでもいうべきであろう。この棒を使っていた生振のアイヌの人がこれをアイヌ語で何と呼んでいたか、本来の名称は不明である。

4-1-1. 「魚打棒1」(運上屋棟展示品・いしかりガイドボランティアの会収蔵)

大きさは、全長26.7cm、柄部の長さ19.5cm、槌部の直径5.0～5.5cmである(図2-1、写真1、表1)。幹と枝の叉木を利用して、幹の部分を槌部にしている。槌部にした幹の部分には太い枝が3本あり、切断面から鋸で除去されたものと推測される。柄部は細く、槌部と柄部の角度は斜めである。樹種は未同定であるが樹皮はカエデに似て

表1. 魚打棒一覧.

資料	図番	収蔵	全長 (cm)	槌部(横方向) の長さ(cm)	小口〈大〉の 径 (cm) ※打面	小口〈小〉の径 (cm)	柄部 (cm)
魚打棒1	図2-1 写真1	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	26.7	12.5	5.5×5.0	上方の切断面：径3.3 下方の切断面：径3.0 側面の切断面：径3.5×4.0	長さ：19.5 幅：1.8
魚打棒2	図2-2 写真2	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	27.5	12.3	5.5	3.5	長さ：21.8 最大幅：5.5 先端幅：2.4×1.8

いる。少なくともヤナギではない。幹の太い方の小口面（打面）全体に叩いた使用痕が認められる。打面の外周の半分ほどの部分、特に下方部に顕著な潰れが認められる。この部分が主要な作業面と考えられる。槌部のもう一方の小口面は2本の枝木に分岐しており、いずれの断面にも切断痕が残り顕著な潰れは観察されない。また、柄部には摩滅による光沢が認められる。「魚打棒2」ほどでないが、長期間の使用されたことにより摩滅したと考えられる。

4-1-2. 「魚打棒2」（運上屋棟展示品・いしかりガイドボランティアの会収蔵）

大きさは、全長26.5cm、柄部の長さ21.8cm、槌部の直径5.5cm程である（図2-2、写真2、表1）。幹と枝がほぼ直角になった叉木の部分を用い、枝の部分を柄部に、幹の部分を槌部に木取りしている。幹の小口面は平坦で、その状態から切断には鋸を使用したとみられる。外面には樹皮が残るが、柄部の下方は縦方向に削って調整している。削り幅は1cm程である。樹種は未同定であるが、表皮の状態から「魚打棒1」とは異なる樹種と考えられる。少なくともヤナギではない。槌部では、幹の太い方の小口面（打面）全体に叩いた使用痕が認められる。打面の外周の半分ほどの部分、特に下方部に顕著な潰れが認められる。この部分が主要な作業面と考えられる。槌部のもう一方の小口面は切断痕が残り、顕著な潰れは観察されない。また、柄部の半ばで樹皮の残っている部分に摩滅による顕著な光沢がある。長期間の使用されたことにより握り部分も摩滅したと考えられる。

以上のように、この2点の「魚打棒」は形状および使用痕からみて、叩いて使用した道具であることは明らかである。枝木の特性を活かして槌にかなった部位を木取りし、加工を加えて仕上げた自作品とみられる。用途について聞き取りからは、捕獲した「サケを叩く」ために用いられたことがわかり、観察した2点の槌部の打面の使用痕

がいずれも下方面に顕著であることは、特定の使用方法のもとに使われ続けられたためと考えられる。年代については、今井家が石狩川でサケ漁に従事した明治20年代以降、もしくは、それ以前からこの漁場にはアイヌの人々が働きに来ていた可能性があり、使用時期はそれ以前に遡ることも考えられる。

4-2. 石狩川のサケ漁と「魚叩き棒」

魚叩き棒については、アイヌ民族の「イサパキニ」という棒状の漁具が知られている。この棒でサケの頭部を叩き絶命させるが、同時にサケの霊を送る意味があるとされる。樹種はヤナギ・ミズキにほぼ限られ、どの木でもよいわけでないといわれている（知里, 1959）。今井氏からの聞き取りによると、第二次世界大戦後の石狩川でのサケ漁では「棒状の魚叩き棒」が使用されていたというが、残念ながら実物資料は収集されていない。石狩川での「棒状の魚叩き棒」の使用については、このほかに次のような聞き取りや資料が確認されている。

【聞き取り事例（70歳代）】

子どもの頃の石狩川右岸（石狩市八幡町地区）の記憶：「確かに石狩川河口右岸のサケ漁場で、水揚げの際、サケを盛んに叩いていたのを見たことがある。棒の形状については、漂着したもの（後述する2018年に石橋が漂着物として採取した魚叩き棒）よりも、さらに太かったような気がする。樹種はアオダモで棒が漁場の壁にずらりと掛けられていた。棒用のアオダモを川岸に植えていた。」（石橋, 2018, 引用内の括弧書きは本稿による補足。）

【絵葉書に残された写真】

昭和初期とみられる絵葉書には河口の曳網で棒状の魚叩き棒をもったと思われる漁夫の姿が写っているものがある（写真6）（田中, 2002）。

【漂着物】

2018年、石橋は石狩川河口左岸で棒状の魚

叩き棒とみられる漂着物を採取したことがある。年代は不明だが、使用時期は近世末から昭和30年代までの間と考えられる。この樹種はヤナギ属であった。（石橋, 2018）

4-3. 小括

石狩川での棒状の「魚叩き棒」の例を紹介したが、今のところ槌状の叩き棒についての記録は確認されていない。また、アイヌ民族のサケ漁で縦槌状の魚叩き棒を使用したという民族誌による記録も知られていない。

T字形の木槌の類例に関しては、石狩低地帯の遺跡から出土した縦槌について集成検討されている（荒山, 2011）。幹と枝の叉木の部分で木取りした木槌については、擦文文化期およびアイヌ文化期に属する41点が確認され、今回紹介した「魚打棒」とされる木槌と類似するものがみられる。その一例に、札幌市K39遺跡恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）出土の縦槌がある（写真7）

（北海道大学埋蔵文化財調査室, 1986）。全長30.2cm、樹種はイチイ、擦文文化期とされる。大きさ、形態的特徴、木取り、使用痕の状態など各所に類似が認められる。特に、小口面の側縁下方寄りが摩滅している点は、先に紹介した2点の「魚打棒」（木槌）の使用痕の状態に類似しており、用途・使用法を考えていくうえで注目される。出土した縦槌から用途を特定することは容易ではないが、「魚打棒」として用いた可能性についてこれまであまり考えられてこなかった。考古資料と民具資料の両者を対象とした縦槌の機能用

途について、今後さらに検討が必要である。

5. 鉄製銚先

5-1. 資料紹介

5-1-1. 銚先の分類

次に、サケを突くために使用したとされる鉄製銚先について記載する。ここでいう銚先とは離頭銚のことである。北海道では、縄文文化早期以来、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化の各期を通じて骨角製の銚先が用いられてきた。また、アイヌ民族の離頭銚では、骨角製の体部に鉄や銅の鏃をつけた「キテ」が知られている（図3、写真8）（北海道開拓記念館, 1981；2003）。「キテ」は、古くから北海道南西部ではクジラ・マンボウ・メカジキ、それ以北では海獣狩猟（アザラシなど）に用いられてきたという（名取, 1945）。

今井氏旧収蔵の鉄製銚先2点は、大きさは異なるが全く同タイプで、全体が鉄製の銚先である。三角形の鏃部、体部には柄を装着するための穴（ソケット）があり、その外面（図1-2に示すA面）にノの字状に外反するカエシがある（注2）。これらの特徴から、柄と銚先が分離する離頭銚の銚先である。この銚先は、写真8に示した「キテ」として知られている骨角製の体部で先端に金属性の鏃をつけたタイプの銚先とは、かなり異なっている。

ここで、「鉄製銚先1・2」、および後述に取り上げる類例との特徴を比較するために、鏃部お

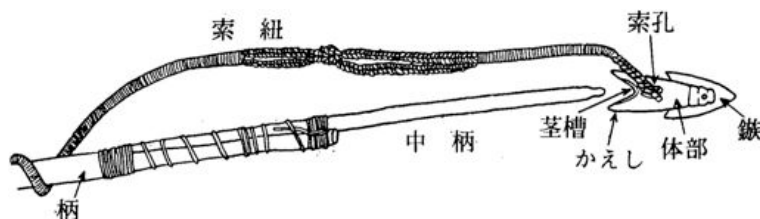


図3. 離頭銚「キテ」の構造と部分名称（大塚, 1977：780）。

よび体部の次に挙げる3つの属性，「①鋸（逆刺）」「②基部・ソケット」「③開口部・カエシ」に着目し，本稿で用いる分類方法を設定する．

【鋸部】（注3）

①鋸（逆刺）

1a) 逆刺の切込みが非常に浅いもの（鋸部の切込率＝切込みの深さ／鋸長＝1/10未満）

1b) 逆刺の切込みの深さが鋸長の中央まで達しないもの（鋸部の切込率＝切込みの深さ／鋸長＝1/10以上～1/2未満）

1c) 逆刺の切込みの深さが鋸長の中央まで達するもの（鋸部の切込率＝切込みの深さ／鋸長＝1/2以上）

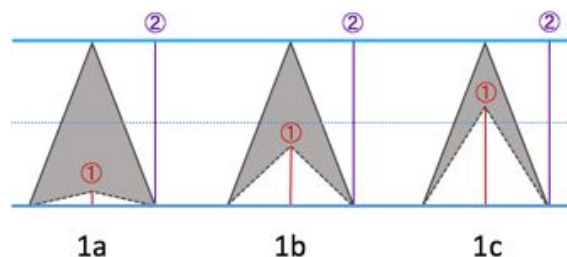
【体部】

②基部・ソケット

2a) 基部とソケットの境目が明瞭に分かれない

表3. 本稿で取り上げる金属製鋸先の分類

分類	該当資料	鋸部【※1】 (逆刺の切込率)			基部・ソケット		開口部・カエシ	
		1a	1b	1c	2a	2b	3a	3b
大別	細分	該当資料（図番）						
A類	A1類	鉄製鋸先1（図2-1） 鉄製鋸先2（図2-2）						
	B1類	類例10（写真12-左）						
	B2類	類例3（図4-3）						
B類	B3類	類例1（図4-1）						
	B4類	類例2（図4-2） 類例7（写真7-1） 類例11（写真12-右）						
	C1類	類例4（図4-4）						
C類	C2類	類例5（図4-5） 類例6（図4-6） 類例8（写真7-2） 類例9（写真7-3）						



【※1】鋸部（逆刺の切込率）の細分類

①：逆刺内側の切込みの深さ

②：鋸部の長さ（鋸長）

もの、もしくは、基部からソケットにかけて徐々に裾を広げるもの

2b) 基部とソケットの境目が明瞭に分かれるもの

③開口部・カエシ

3a) 開口部とカエシが一体化し、開口部側面が斜状のもの

3b) 開口部が直線的でB面にカエシが付き、開口部とカエシの側面形態が明瞭に分かれるもの

これらの属性①～③の組合せからは全12通りのタイプが想定されるが、本稿に取り上げる銚先（全体が金属製で作られるもの）に該当するものとして、A1類：1a-2a-3a, B1類：1b-2a-3a, B2類：1b-2a-3b, B3類：1b-2b-3a, B4類：1b-2b-3b, C1類：1c-2a-3b, C2類：1c-2b-3bの7類に分類する（表3）。

5-1-2. 「鉄製銚先1」（運上屋棟展示・いしかりガイドボランティアの会収蔵）（図2-3, 表2, 写真3）

大きさは、全長は9.9cm, 銚の長さ3.0cm, 銚の幅1.9cm, ソケットの開口部幅1.6cm, 重さは44gである。鉄製で、銚・基部・ソケット・単尾のカエシを一体で作る。分類では、A1類（1a-2a-3a）に該当する。銚の平面形はほぼ二等辺三角形で逆刺の切込みが小さい。また、銚の中央部に先端から底辺まで鎗のような盛り上がりがある。ソケットA面の末端外側にノの字状に突き

出した単尾のカエシがある。ソケットの深さはカエシの先端から4.8cmである。ソケットのB面には鉄板を丸め合わせたつなぎ目の痕跡が残り、鍛造により作られたと考えられる。おそらく長方形の素材を手作業で叩いて作ったものと推測される。

銚の下端から柄を装着するためのソケットの膨らみまでの間の基部約2cmにわたり細い撚り紐が巻かれている。植物性の繊維素材による撚紐4組（各長さ16cm）がそれぞれループするように巻きつけてあり、結束固定されていないため、わずかに動くようになっている。さらに、そのうち3組の紐は途中から1本の太い紐に撚られ、その境目付近で銚の根元に巻いたもう1組の紐で結んでいる。紐の全長は48cm, このうち太い紐の部分は長さ32cmおよび太さ0.8cmである。銚の根元に巻いた紐は、他の紐と色合いや材質が異なることから他の3組の紐よりも新しい可能性がある。なお、ループ状に巻いた紐と基部との間には薄い植物の皮（未同定であるが一見してサクラの樹皮のようなもの）を挟んでおり、皮の表面を紐側に向けている。このような別素材を挟む装着方法は鉄と紐との強い摩擦を避けるためではないかと考えられる。

この資料は、今井氏により上記のオリジナルの紐から、さらに210cmの麻紐、末端に大型動物の犬歯（ヒグマの犬歯か、長さ5.6cm）の根付、ヤナギ製の柄を付けて全体が復元されている。

表2. 鉄製銚先一覧.

資料	図番	収蔵	全長 (cm)	銚の長さ (cm)	銚の幅 (cm)	ソケット幅 (cm)	重量 (g)	分類	備考 (cm)
鉄製銚先1	図2-3 写真3	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	9.9	3.0	1.9	1.6	44	A1類 1a-2a-3a	銚の厚み：0.65 カエシの高さ：2.3 ソケットの深さ： カエシ先端から4.8
鉄製銚先2	図2-4 写真4	石狩尚古社資料館 (今井氏旧収蔵)	12.3	3.4	2.8	1.9	63	A1類 1a-2a-3a	銚の厚み：0.65 カエシの高さ：3.4 ソケットの深さ： カエシ先端から6.3

5-1-3. 「鉄製銚先2」（石狩尚古社資料館収蔵）
（図2-4、表2、写真4）

大きさは、全長12.3cm、銚の長さ3.4cm、銚の幅2.8cm、ソケットの開口部幅1.9cm、重さは63gである。鉄製で、分類では、A1類（1a-2a-3a）に該当する。「鉄製銚先1」と比較すると、同タイプであるが、本資料の方が大型で、全長が2.4cm、銚の長さで0.4cmほど長い、重量も本例の方が20gほど重い。銚の平面形は二等辺三角形に近い。また、銚の中央部に先端から底辺まで鎚のような盛り上がりがある。ソケットA面の末端外側にノの字状に突き出した単尾のカエシがある。ソケットの深さはカエシの先端から6.3cmである。ソケットのB面には鉄板を丸め合わせたつなぎ目の痕跡が明瞭に残り、鍛造により作られたと考えられる。

「鉄製銚先2」にも、銚の下端からソケットまでの基部2.5～3.0cmほどの外面に植物性の繊維素材による撚紐4組（各長さ14cm）がループするように巻かれている。さらに、これらの細い撚り紐

を1本の太い紐に撚り合わせている。紐全体の長さは37cm、このうち太い紐の部分は長さ29cm、太さ0.6cmである。また、撚紐が巻かれている部分には、基部と紐との間に薄い植物の葉ないしは茎のようなものが当てられている。材質は草本の平行脈が銚先の長軸に並行して観察され、一見してイネ科の笹の稈を半割にしたようなもので、表面を紐側に向けたものとみられる。基部にループした撚紐の巻き方は「鉄製銚先1」と同様である。「鉄製銚先1」および「鉄製銚先2」は大きさに違いがあるものの、形態や製作技術の特徴が酷似し、また、銚先本体のみならず、紐の巻き方や基部と撚紐の間に別素材を当てて装着することにも共通点が認められる。

5-2. 北海道内博物館等収蔵の金属製銚先

5-2-1. 苫小牧市美術博物館収蔵品（図4-1・4-2・4-3、表4、写真9）

苫小牧市美術博物館では類似の金属製銚先が3点（類例1～3）確認された。銚先はすべてアイ

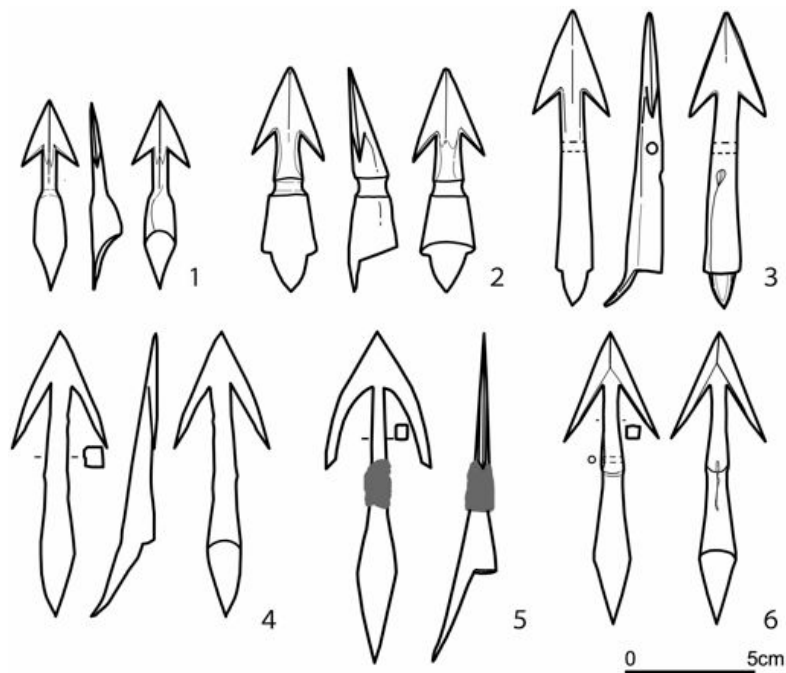


図4. 金属製銚先の類例（1～3は類例1～3、4～6は類例4～6に対応）。
1～3：苫小牧市美術博物館収蔵、4～6：北海道博物館収蔵。
（資料調査による実測（1～3）および簡易実測（4～6）より作図）

ヌ民族資料として収蔵されたもので、資料名は「キテ」となっている。同館には、この3点に加え、骨角製や骨角と金属を組合せた銚先を含め「銚(キテ)」は全部で28点あり、採取地域が示されていない3点を除き「苫小牧」と「浦河」とある(苫小牧市博物館, 1988: 14-15)。目録に掲載される計測値から、採取地域の示されていない3点が本稿で類例として取り上げる3点に該当するものと考えられ、具体的な採取地域は不明である。同館のアイヌ民族資料の該当地域については、胆振・日高地方に関するものが多い。そのような性格から、本資料もこの地域に関連したものではないかと予想されるが、明らかにするためには、さらに調査が必要である。

類例3点の分類について、類例1(図4-1)はB3

類(1b-2b-3a)、類例2(図4-2)はB4類(1b-2b-3b)、類例3(図4-3)はB2類(1b-2a-3b)に該当する。大きさやソケットの形状に違いはあるが、銚部の形態的特徴は共通する。石狩市の銚先2点に比べて銚の逆刺部分の切込みが深い。一方、後述する北海道博物館収蔵の3点の銚のように逆刺は細くならない。ソケットの開口部は概して3点とも直線的で、単尾のカエシの長さは短い。カエシの形状には違いがみられ、類例3はノの字状に外反するが、他2点(類例1・2)は外反していない。また、類例2はソケット開口部の開きが大きい。基部からソケットにかけての形状にも違いがある。類例1は基部を細く直線的に作り出し、ソケットから膨らみのある開口部を作り出している。類例2は基部とソ

表4. 金属製銚先の類例一覧.

類例 No.	図番	収蔵 【資料番号】	全長 (cm)	銚の 長さ (cm)	銚の幅 (cm)	ソケット 幅 (cm)	重量 (g)	分類	備考(cm)	備考3
類例1	図4-1 写真9	苫小牧市 美術博物館	7.2	2.5	2.0	1.2	10.6	B3類 1b-2b-3a	茎部の幅: 0.6 カエシの高さ: 1.7 ソケットの深さ: カエシの先端から3.7	単尾カエシの形状が外側に 反らずほぼまっすぐ。 裏面のソケット部に、つなぎ 目とみられる痕跡がわず かに残る。
類例2	図4-2 写真9	苫小牧市 美術博物館	8.6	3.6	2.8	2.1	32.8	B4類 1b-2b-3b	基部の幅: 0.9 カエシの高さ: 2.0 中央部に周る溝幅: 0.5 ソケットの深さ: カエシの先端から5.3	単尾カエシの形状が外側に 反らず若干内側を向く。 ソケットの穴は、中央部に 周る溝の奥まで及ぶ。
類例3	図4-3 写真9	苫小牧市 美術博物館	11.4	4.0	3.0	1.4	49.5	B2類 1b-2a-3b	基部: 1.0程 カエシの高さ: 2.2 両側面穿孔: 径0.38~0.45 ソケットの深さ: カエシの先端から5.4	両側面の孔に細い銅鉄線を 撚り合わせたワイヤーが通 されている。 単尾カエシはノの字形に外 へ反る。 裏面につなぎ目とみられる 痕跡が4cm程残る。
類例4	図4-4 写真10	北海道博物館 【32790】	11.0	4.5	4.0	1.3	—	C1類 1c-2a-3b	基部の幅: 0.7程 カエシの高さ: 2.5	基部断面が方形。 鉄錆の付着あり。
類例5	図4-5 写真10	北海道博物館 【89590】	12.5	5.0	4.0	1.5	35.4	C2類 1c-2b-3b	基部の幅: 0.5程 カエシの高さ: 2.5 ソケットの深さ: カエシの先端から5.5	基部断面が方形。 銚の逆刺が直線的ではなく 緩やかにカーブする。 基部に紐が付けられてい る。 使用地域: 幌別
類例6	図4-6 写真10	北海道博物館 【89591】	11.5	4.2	3.7	1.5	32.1	C2類 1c-2b-3b	基部の幅: 0.6程 カエシの高さ: 2.0 基部下方の両側面に 穿孔: 径0.3 ソケットの深さ: カエシの先端から5.0	基部断面が方形。 裏面の中央付近に、つなぎ 目とみられる痕跡が2cm程 残る。 使用地域: 幌別

ケットの間に溝が一周する。類例3は基部両側面を穿孔してワイヤーを通し、基部からソケットにかけて徐々に裾を広げる形状に作られている。

5-2-2. 北海道博物館収蔵の鉄製銚先（図4-4・4-5・4-6, 表4, 写真10）

北海道博物館では3点（類例4～6）の金属製銚先が収集されており、資料調査を実施した。このうち類例4（図4-4, 資料番号：32790, 資料名：突き銚）は採集された銚（詳しい場所は不明）で、目録記載からはアイヌ民族資料であるかどうかわからない（北海道開拓記念館, 1981）。類例5（図4-5, 資料番号：89590, 資料名：銚先）、および類例6（図4-6, 資料番号：89591, 資料名：銚先）は幌別（現登別市）で採集された銚先で、更科源蔵の収集品である（北海道開拓記念館, 1990）。目録の解説には、「2点は、鉄製で、本州の「ツキンボ」に類似する。鍬の付き方、および「かえし」の形は、大塚氏のType-Eに酷似する。使用地は登別幌別となっている。骨製銚のType-Eをまねて鉄で製作したものである。」（北海道開拓記念館, 1990：28）とある。大塚のType-Eに該当する銚先は体部が骨角製でソケットのカエシの形態が単尾であることから、カエシの特徴が類似する。一方、鍬部と体部の構造は相違しており（「一体」・「組合せ」）、鍬の逆刺や基部の形態も異なっている。特に類例4～6は鍬部の逆刺は細く、基部は断面が方形で細いなど相違が大きい。

分類では、類例4はC1類（1c-2a-3b）、類例5および類例6はC2類（1c-2b-3b）に該当する。いずれも鍬部の切込みが深く逆刺が細長い。類例5は逆刺のラインが湾曲している。また、これら3点の基部は断面がいずれも方形である。ソケット単尾のカエシは3点いずれも長さがある。類例5は基部に紐を付けている点で「鉄製銚先1・2」に共通するが、紐の装着方法には違いがみられる。類例6は類例3と同様、基部の両側面に貫通する小さな孔が開けられている。ワイヤーは残っていないが同様の目的のラインホールとみられる。

5-3. 類例にかかわる関連資料

5-3-1. 本州の金属製銚先

本州での金属製銚先の類例について確認する。

「2. 調査の経緯」に触れたとおり、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園には昭和12年に稲生典太郎が本州で採取した「ミサキ銚」という名称の銚3点の収蔵がある（類例7～9）（写真11）。台帳には「沼津」（静岡県）の資料とある。そこで、同地域の銚について調べていたところ、「沼津歴史民俗史料館だより」に、駿河湾付近では「突ん棒漁」というカジキの銚漁がおこなわれており、離頭銚が使用されていたことが記されている（図5）（神野, 1984；沼津市歴史民俗資料館, 2012a；2012b）。また、沼津より東に位置する南房総市の水産業史には、次のような記載がある。

「突きん棒漁と呼ばれる刺突漁は、江戸時代初期の17世紀当時「当てん棒漁」と呼ばれ、房総半島南域で行われており、江戸時代に手投げモリによる突き取り漁で行われていたクジラ漁の影響を受けて、カジキな

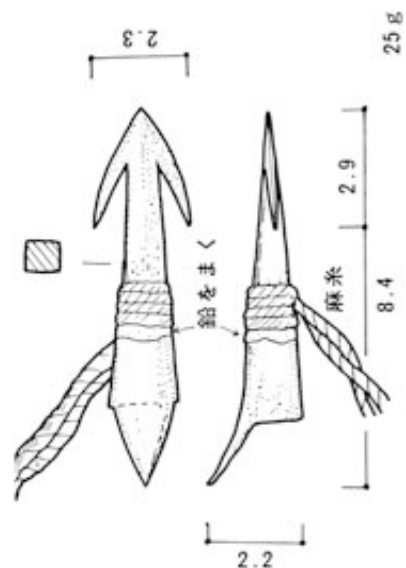


図5. 突ん棒漁の銚（神野, 1984）。

どの大型魚を捕獲する療法として確立した考えられます。(中略)1930年代(昭和5年頃)には、漁船の動力エンジンに改良が加えられ、最盛期を迎えます。漁場は銚子沖や伊豆諸島を中心に三陸沖や北海道沖まで拡大し、漁期も2月から11月頃まで長期化しました。」(南房総市, 2006)。

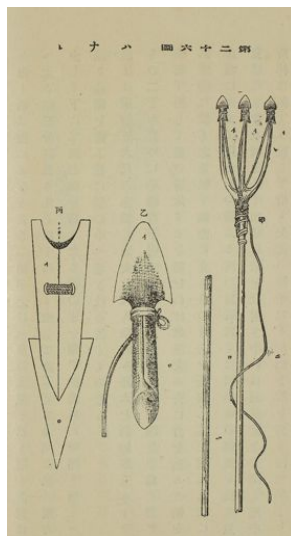
北海道のどこまで船が来たかは不明であるが、こうした漁集団から銚先が伝えられた可能性が考えられる。

5-3-2. 文献にみる北海道の銚先の種類

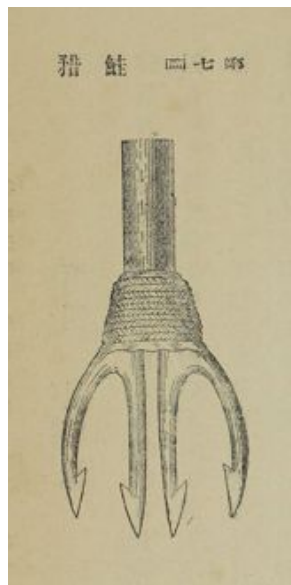
『日本水産捕採誌』の7巻「特殊漁業」の項目には、北海道で使用された鮭漁具「鮭𧰨」や鰓𧰨(オットセイ)漁の離頭𧰨「ハナレ」などが紹

介されている(図6)(農商務省水産局, 1912)。このうち北海道南部の鰓𧰨漁の「一本ハナレ」の𧰨には、全体が金属製とみられる𧰨先と、骨角製の体部に金属製の鍬が付けられたとみられる𧰨先との2種が示されている。前者の𧰨先は、鍬部と体部を一体に作り出したものとみられ、鉄製𧰨先に類似するものと考えられる。また、安房国および相模国沿岸で使われる「突漁(ツキンボ)」, 安房国安房郡の外海で用いられる「𧰨」が紹介されており、これらに描かれている𧰨先の絵図も、その特徴から同類のものと考えられる。

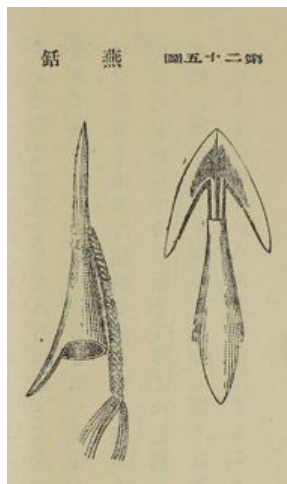
『日本水産捕採誌』は、明治19(1886)年に農商務省水産局が編纂をはじめ、明治28(1896)年に原稿が完成したものである。デジタルアーカイブを公開している中央水産研究所図書資料館ホー



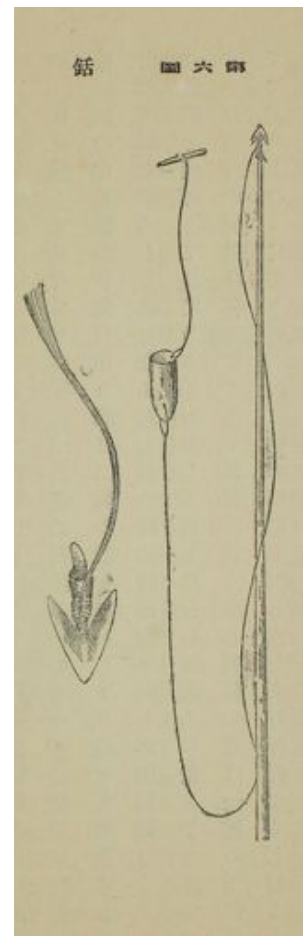
1. 鰓𧰨ハナレ(北海道)



2. 鮭𧰨(北海道)



3. 突漁(安房・相模)



4. 𧰨(安房国)

図6. 『日本水産捕採誌』(農商務省水産局, 1912)に紹介される漁具。
(国立研究開発法人 水産研究・教育機構収蔵)

ムページには、この書物が編纂当時日本に現存した全国の漁具漁法をまとめ、全国各地の現物調査、古書から当時最新の書物までの幅広い文献調査などをもとにしていることが解説されている（注4）。図6に示した絵図の銚先も、明治前半期もしくはそれ以前から伝わる漁具を示したものと考えられる。

5-3-3. 現在販売・使用される金属製の銚

現在、製造・販売される銚先にも類例をみることができ、石橋は、「チョッキリ」という名称で2種の銚先を購入した（類例10・11）（写真12）。

写真12左は、全長9.8cm、銚の長さ3.0cm、ソケット開口部の幅1.2cm、ソケットの深さ3.1cm、重量26.9gである。両側面に貫通する直径0.4cm程の穿孔がある。単尾のカエシはノの字状に外反する。分類では、B1類（1b-2a-3a）に該当する。

写真12右は、全長9.3cm、銚の長さ3.0cm、ソケット開口部の幅1.1cm、ソケットの深さ2.3cm、重量26.9gである。両側面に貫通する直径0.4cm程の穿孔がある。単尾のカエシはノの字状に外反する。分類では、B4類（1b-2b-3b）に該当する。

5-4. 小括

今回調査した範囲では、今井氏旧収蔵の鉄製銚先2点は離頭銚の銚先であり、系統的には本州で用いられていた「ツキンボ」や「チョッキリ」と呼ばれる離頭銚の銚先と同類のものを踏襲したものと考えられる。この種の銚先がおおまかには明治初頭前後に北海道に入り、アイヌ民族に伝わった可能性が高い。伝統的に知られている「キテ」とは形状を異にするが、キテに代わる品として使用された可能性がある。

今回の調査をとおして、北海道博物館と苫小牧市美術館にも銚先の銚部やソケットなどの形状に多少の差はあるが同様の銚先があることを確

認した。傾向として胆振地方で採取された資料がみられるが、どのように使用されたのか、捕獲対象などについては具体的ではない。本州で用いられるこのタイプの銚はカジキを捕るために使用されており、苫小牧市美術館や北海道博物館が収蔵している同類の離頭銚も大型魚種や海獣狩猟が対象になった可能性が考えられる。また、既に述べたように、昭和30年代に南房総市付近の突きん棒漁の範囲が北海道にまで及んだということから、これらの銚は比較的新しい時期のものである可能性もある。

今井氏からの聞き取り調査から得た情報のような、鉄製銚先をサケ漁に用いたというのは今のところ北海道内で知られていない。しかし、文献に当たってみると、幕末の記録に、現在のサハリン島で「ハナレ」をサケ漁に使用したとみられる記述がある。松浦武四郎の「蝦夷山海名産図会 第一」によると、北蝦夷地（樺太）敷香で、「（前略）鱒・鯡・チライ・鮭を追ひ、皆括槍にて突取り」（秋葉, 1997: 280）とある。「括槍」については、同誌に「括槍（ヲツプ）の図」があり、「キテ」と同類の離頭銚の絵図に添えて「松前にてハナレと云」と記されている（秋葉, 1997: 274-275）。この記録から、サハリン島では離頭銚を使ってサケ・マスなどを対象に川漁をすることがあったとみられる。このような例から考えると、北海道でもキテがサケ漁に使用された可能性はある。

6. おわりに

以上、石狩市で新たに知られた石狩川周辺で使われたとみられる鮭漁具2種について述べた。

「魚打棒」は縦槌の形であり、現時点では少なくとも北海道内では類例が知られていない。また「鉄製銚先」については、本州以南の太平洋側でみられる「ツキンボ」などと呼ばれる漁に用いられてきた銚先が、明治期に道南や胆振地方沿岸付近に伝わり、それが石狩まで持ち込まれ、サケの捕獲に使用されたと考えられる。

今回、偶然の機会から新たな資料を知ることができたが、今後も埋もれている民具に注意を向け、当該地域の物質文化について明らかにしていきたい。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、石狩市の今井光男氏をはじめ、資料を借用しました石狩尚古社資料館主宰中島勝久氏、「いしかりガイドボランティアの会」には大変お世話になりました。石橋による資料旧収蔵者である今井氏からの聞き取り調査にあたっては、いしかり砂丘の風資料館の工藤義衛学芸員に仲介の労をとっていただきました。鉄製銚先2点のX線写真の撮影にあたっては、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターに大変お世話になりました。国立研究開発法人水産研究・教育機構水産研究所、沼津市歴史民俗資料館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園には情報提供をいただき、苫小牧市美術博物館、北海道大学埋蔵文化財調査センター、北海道博物館には資料調査にあたり大変お世話になりました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

注1 ①の漁場に関して、今井家が経営する以前は、かつて石狩役所に勤めアイヌ通辞をしていた玉川啓吉が経営していたという(今井, 2013)。

注2 「鉄製銚先1・2」については、X線撮影により、紐が装着されている基部本体の形状も確認することができた。

注3 本稿では道内に収蔵される類例の集成にとどまるため資料数が少ないこともあり、銚部形態の違いが、(1)銚先の機能・用途(捕獲対象、漁法)に関係するものなのか、(2)製作技法や帰属時期・地域性に関係するもののかなど、その要因の検討までは及んではおらず、細分基準は暫定的なものであり、今後も検討が必要である。

注4 水産研究・教育機構図書資料デジタルアーカイブ、『日本水産捕採誌』の解説を参照した(URL: http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D_archives/2013DA021/20103DA021.html)。

引用文献

- 秋葉實〔翻刻/編〕, 1997. 蝦夷山海名産図絵. 松浦武四郎選集 二, 274-280.
荒山千恵, 2011. 石狩低地帯から出土した縦樋について. 北海道考古学, 第47輯: 71-86.
知里真志保, 1959. アイヌの鮭漁一幌別における調査
知里真志保著作集 3: 67-83.

北海道開拓記念館, 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1, 民族1. 19.

北海道開拓記念館, 1990. 更科源蔵氏資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第22集.

北海道開拓記念館, 2003. 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.

北海道大学埋蔵文化財調査室, 1986. サクシュコトニ川遺跡1・2. 北海道大学.

今井光男, 2013. 石狩市での今井家漁撈回顧. いしかり暦, 26: 24-31.

石橋孝夫, 2018. 石狩浜漂着の魚叩き棒はだれのものか. いしかり砂丘の風資料館紀要, 8: 1-22.

神野善治, 1984. カジキの突ん棒漁. 民具あれこれ 21. 沼津市歴史民俗資料館資料館だより, 10(2): 2.

南房総市, 2006. 市運営観光情報サイト: 南房総いいとこどり. 南房総郷土史, 水産業史; 刺突漁. https://www.mboso-etoko.jp/kyoudo/suisan/shitotu_01.html

名取武光, 1945. 銚頭寸話 噴火湾アイヌ捕鯨. 北方文化出版社. 131-133.

農商務省水産局, 1912. 日本水産捕採誌 7. 国立研究開発法人 水産研究・教育機構所蔵.

沼津市歴史民俗資料館, 2012a. 駿河湾の漁. 芹沢松雄さんの漁話 カジキのツキンボ(突きん棒漁) 2. 沼津市歴史民俗資料館だより, 37(1): 3-4.

沼津市歴史民俗資料館, 2012b. 駿河湾の漁. 芹沢松雄さんの漁話 カジキのツキンボ(突きん棒漁) 2. 沼津市歴史民俗資料館だより, 37(2): 3-4.

大塚和義, 1977. アイヌのキテ(回転式離頭銚)の諸系列: 形態分類と編年. 国立民族学博物館研究報告, 1(4): 778-822.

田中實, 2002. 石狩川口に於ける鮭網引きの光景. 札幌維新堂絵ハガキ, 石狩川鮭漁の実景. 石狩漁業組合史. 石狩漁業協同組合. 口絵20.

苫小牧市博物館, 1988. アイヌ民族資料目録. 苫小牧市博物館所蔵目録 2.



1-1. 平面A



1-2. 平面B



1-3. 側面. 槌部の小口面（大）打面



1-4. 槌部の小口面（小）



1-5. 平面Aの槌部. 打面側縁のささくれ

写真1. 魚打棒1.
(いしかりガイドボランティアの会收藏
・今井氏旧收藏)



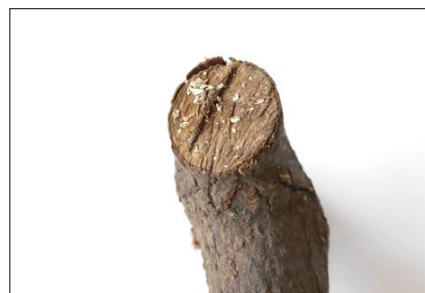
2-1. 平面A



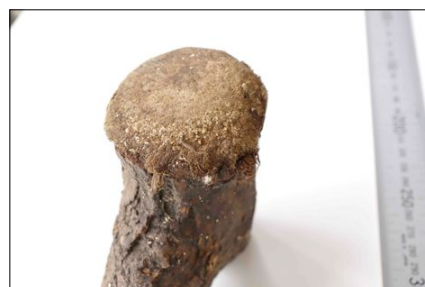
2-2. 平面B



2-3. 側面. 槌部の小口面（大）側 打面



2-4. 槌部の小口面（小）



2-5. 槌部の小口面（大）打面の磨耗

写真2. 魚打棒2.
(いしかりガイドボランティアの会收藏
・今井氏旧收藏)



3-1. 鉄製銚先 1 (全体)



4-1. 鉄製銚先 2 (全体)



3-2. 鉄製銚先 1 (紐装着部)



4-2. 鉄製銚先 2 (紐装着部)



3-3. 鉄製銚先 1 (B面)



4-3. 鉄製銚先 2 (B面)



3-4. 鉄製銚先 1 (側面)



4-4. 鉄製銚先 2 (側面)

写真3. 鉄製銚先 1.
(いしかりガイドボランティアの会收藏
・今井氏旧收藏)

写真4. 鉄製銚先 2.
(石狩尚古社資料館收藏・今井氏旧收藏)



写真5. 棒状の魚叩き棒. ヤナギ.
平取町で使用／現代（いしかり砂丘の風資料館収蔵）



写真6. 昭和初期絵葉書. 円内,
棒状の魚叩き棒か（田中, 2002）.



写真7. 縦槌. 札幌市K39遺跡恵迪寮地点
（サクシュコトニ川遺跡）出土. 擦文文化.
（北海道大学埋蔵文化財調査センター収蔵）



写真8. キテ. 本体（体部）は骨製,
刃（鏃）は金属製. 1918年以前.
（北海道博物館収蔵・画像提供）



9-1. 金属製銚先 (A面)
(左から類例1・2・3)



10-1. 金属製銚先 (A面)
(左から類例4・類例5・類例6)



9-2. 金属製銚先 (B面)
(左から類例1・2・3)



10-2. 金属製銚先 (斜後方より撮影)
(奥から類例4・類例5・類例6)



9-3. 金属製銚先 (側面)
(手前から類例1・2・3)



10-3. 金属製銚先 類例6 (側面)

写真9. 金属製銚先 類例1～3.
(苫小牧市美術博物館収蔵)

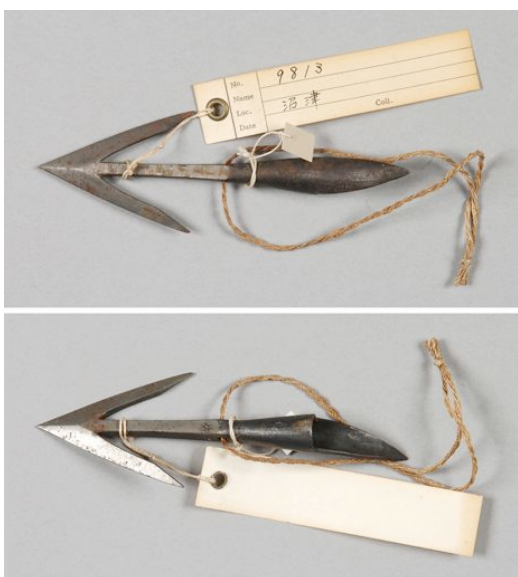
写真10. 金属製銚先 類例4～6.
(北海道博物館収蔵)



1. 類例7. No.9811 (長さ4.1cm)



2. 類例8. No.9812 (長さ13.8cm)



3. 類例9. No.0913 (長さ11.8cm)



写真12. 現在も使用されている金属製鉈先
(販売購入品). 左: 類例10. 右: 類例11.

写真11. 金属製鉈先. 類例7～9.
(北海道大学北方生物圏フィールド科学
センター植物園収蔵・画像提供)